
魔法少女リリカルなのはRewrite

由真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはRewrite

【Nコード】

N9916Z

【作者名】

由真

【あらすじ】

『転生者、暴れます』

ある日、ひとりの少年が交通事故で死ぬ。

本来はそこで人生は終わりなのだが、どこからともなく現れた女によって転生させられることになる。

命令は、『蒼く澄んだ瞳の少年を探せ』……………。

その訳の分からない命令と僅かなヒント、そして対価に得た超常的な力を手に、少年はこの世界をひた走る。

途方もなく深く黒い交錯、そしてその運命に巻き込まれる二人の少年と魔法少女達。

魔法少女リリカルなのはR e w r i t e、始まります。

P r o l o g u e (前書き)

勢いでプロットから能力まで4時間で決めた。後悔はしてない。

ほかの知らない人とかの見知らぬネタと被っても振り切る覚悟で書いていきます。

……だけど、知ってる作品とは極力被らないようにしないとね………。

Prologue

ここは地球。

取り留めて何もない、我々がよく知る地球。

強いてあるとすれば、昨今から云われる地球温暖化、異常現象などが謳われる。

そんな地球の日本、とある都道府県の郊外の道をひとりの少年が歩いていた。

見た目は至って普通だ。どれを取っても一般的なルックスと身体能力。背は若干低い。

ただ、頭の中身は日本の高校生では最高クラスにある。

「はぁ：帰ったらまた勉強なんだろうな。いったい息子の人生をなんだと思ってんだ」

少年はぶつくさ言いながら、音楽プレイヤーを片手に街路をひた歩く。

聞いている音楽は『PHANTOM MINDS』。

むろん、劇場版魔法少女リリカルなのはの曲だ。

そう、彼は所謂オタクと呼ばれる人間である。

親に隠しては、アニメグッズを買える範囲で揃えては楽しむ。親は

少年は目を覚ます。

先程まで目の前にあったトラックはいずこへ、あたりは上下左右真っ暗でしかなかった。

しかし、地面にいるという感触はあった。試しに未だに身に付けていた時計を落としてみたら、コツンという音がする。

「くそ……いったいどこだよ、ここは。まさか死んだんじゃないだろうな」

自分で言ったのにも関わらず、まず死んだだろうなという思いを持っていた。

少年は最後に見えた映像のブレ方から速度を割り出し、見えた感じの仮の質量、予想ブレーキ位置等を考慮した結果、醜い肉の塊になるのは必至だということが分かった。

だからこそ、がくつとうなだれる。

「マジかよ………案外ポックリ逝くもんなんだな、人間って」

そんなことを言いながら、少年の瞳は絶望には染まっていなかった。実際、生きているほうが地獄だと感じる時期もあったんだ……それなら、別にここで終わってもいい。

「……だけど、願うことなら」

オタクの人間なら、誰もが憧れる二次元。そこで最高の力を得て敵を蹂躪し、女の子に好かれない。

そんな願望を抱いても、所詮それはエンターテイメント。二次元に行けば、二次元が自分の三次元に昇華されるだけに過ぎない。

……だが、少年はそうしたくて二次元に行ってみたいとは思っていない。

というか、恋愛は正直どうでもいい性格だった。

ただ、生まれ変わるならこの世界よりかは別の世界で生きたい。その程度の願望である。

そして、それを思ったとほぼ同時に、正面の足元に幾何学的な紋様が浮かび上がったかと思うと、そこから人が現れた。

「うわあああああ!!!!?」

少年は慌てて飛びすぎる。

「……そこまで驚くかしら」

魔法陣から現れた人は女性とおぼしき声を発する。

黒いフードを被っており、全容はよくわからないがわずかに見える肌を見る限りでは女性であった。

「いや驚くって。で……ここは死後の世界であってるのか?」

「正確には死ぬ直前よ。ほら、よく言うでしょう?死ぬ直前には走馬灯が見える」と

「大してかわらないじゃん」

少年はため息をついた。

それは女にとってはどうでもいいことで、スルーして話を進めはじめる。

「ところで、あなたは願望があるんじゃない？」

「え……」

少年はドキツとする。まさか心の声が聞こえたんじゃないだろうか。

「ふむ。第二の人生を歩みたいのね」

「駄々モレ!？」

少年は嘆いた。しかし、女は待つことをしなかった。

「その願い、叶えてあげる。ただし強制イベント」

「え————」

強制イベントという単語にげんなりとしたが、自分のささやかな願望が叶うならまあいいかな……少年はその程度に思っていた。

「まあいいじゃない。見た目や能力はあなたが望むものを差し上げましょう」

「…それがいわゆるチートや厨二設定と呼ばれるものになってるか」

「ええ、もちろん」

わずかに心が高鳴る。と、同時になんだかんだで最強に憧れる自分が悲しくなった。

「でもやっぱり強制イベントで」

「結局かい!!」

「ええ。容姿はイケメンで良いわよね? そうね、茶髪で黒く澄んだ瞳でいいかしら。体は……9歳ね」

「待てい、なんで9歳なんだよ」

「対価よ、文句ある? それともこのまま死ぬ?」

「若返りサイコオオイヤツフウイイイイイ!!」

少年はただでさえ生き返れて、さらに能力をくれるというのに出過ぎた真似だと思った。

「そうそう…能力に何か注文は?」

「注文?」

「どうせなら好きな能力は最低限使いたいでしょ」

それもそうだと思う。そう考えた少年は女に軽く耳打ちした。

「…なるほど。だけど三つ目の能力については一部改変させてもらうわ。それはベースが悪いと宝の持ち腐れになるから…」

「ああ、構わない」

「なら……決まりね」

女は妖艶に微笑む。

と、そこで少年は女に疑問を投げかけた。

「それで。俺になにをさせたいんだ? 転生させてこんな能力まで寄越して」

「……………暇潰し?」

「オオオイ!!!」

「さ、いつてらっしゃい」

女は指をパチンと鳴らす。すると奇妙な風の奔流が少年を包み、足元に幾何学的な紋様が現れた。

すでに、その能力が付与されていたからか、少年にはそれが転送魔法だということがわかった。

「テメツ、どこ飛ばす気だ！」

「地球よ」

「地球かよ！」

また逆戻りかと、少年は怒鳴る。

「地球といってもあなたの地球じゃなくてよ」

「はあ!？」

「そこへ行つて、あなたは茶髪で蒼く澄んだ瞳の少年と出会いなさい。大丈夫、変なことしなければ会えるから」

「はあ!？」

「ヒントは、魔法少女、守護騎士、闇の書……そして時空管理局」

少年を包み込む奔流が激しさを増し、ついには少年の体を飲み込んだ。

「大丈夫、失敗したらリプレイ出来るから☆頑張れ少年」

「ちょ、待てよおおおおお!!!!」

少年は、そのまま魔力の渦に飲み込まれた。

取り残された女は、上を崇めながら呟いた。

「少年の道に、幸おおからんことを」



ここは時空管理局という組織が管理している世界のひとつ。

あたりはずでに暗く、遠くでは森のさざめきや生物の鳴き声も聞こえる。

その寒氣際立つ森の中を、一人の少年と一匹の異形な何かが駆けていた。

「ダアアアッ!!!」

少年は襲い掛かる敵に気合の一閃を振るう。

その一撃は敵を簡単に切り裂き、敵は血の飛沫をあげる。

しかし、敵の猛攻は止まらない。

「来るなッ来るなアアアア!!」

絶叫しながら、正確無比な攻撃を叩き込んでいくが、敵は倒れる事を知らない。

さて、この少年の説明をせねばなるまい。

少年は茶髪で寝癖が酷くなったような髪型で、体軀はまだ10歳程度のものだった。身に纏うのは、病院に入院する子供が着るような病院着に似たもの。

そして、少年の手には剣型のデバイスが握られている……と言っても非人格型で且つ、非殺傷設定などという魔導師のデバイスになくてはならないものを備えていない。

実質、合法質量兵器といっても過言ではなかった。

少年は追いつかれては斬り、追いつかれては斬りを繰り返していた。それでも、斬っても斬っても速さは衰えるどころか逆に増しているようにも見えるのだから、子供には行き過ぎたホラー以上の恐怖を与えていた。

「来るなアアアアアア!!」

少年は、振り返り様に自分の限界にまで練り込んだ魔力を蓄えた剣で斬り上げる。

斬り上げた瞬間に、蓄えていた魔力を一気に解放したため魔力爆発

が起きる。

「ハアツ！はあ…ひつぐ………はあ…ぐ…はあ…」

激しい息切れと、8割以上が吹っ飛んだ敵の体を見たときの僅かな安堵からくる涙。

この時の状況は、同年代の子供は元より…大人でも堪え難いものであることには変わりない。

それでも、この10歳の子供は限界が見えていたとは言え耐えきっていた。

しかし。

その安堵は次第に絶望に変わる。

完全にではないが、再起不能なまでに吹き飛ばした。
それなのに、どういうわけか敵は完全に再生していた。

「あっ………あっ………」

急に立ち止まり、胸の早過ぎる鼓動に体もついていけない…体力だっってもう限界を超えている。

早い話、立って剣を構えているのも精一杯なのだ。

助けはこない。逃げても逃げられない。

唯一、助かる手立てがあるとするならば…自らの手で敵を倒すしかない。

敵がゆっくり品定めをする。少年は固まっただまま…いや、それでも戦闘体勢ではあった…敵を見据えていた。

ここで、少年の記憶は一旦途切れることになる。

P r o l o g u e (後書き)

閲覧ありがとうございます。

現時点では二人の主人公の名前は明かしてません。
一人についてはしばらく後になります。

とりあえず、転生させたほうから書いていきます。
応援していただければ、幸いです。

第1話 選択（前書き）

第一話……短いですが、ご了承を。

第1話 選択

「う、うぐ………」

俺…舞阪千里は目を覚ました。…オイ、女みたいな名前っつーな。

起き上がって辺りを見渡すと、今までの風景とは別の……とはいえ今までと大差ない世界が広がっていた。

「あのアマ……次会ったらシバいてやる」

いきなり転生だとかチート能力だとか。意味分からねえぞタコが。……まあでも能力をくれたのは助かる。転生させて命令をやれでハイオシマイだとどうしようもないしな。

とりあえず……くれた能力を確認するか。まずはそれからだ。

俺は手を軽く開いて念じる。

「……王の財宝」
ゲートオブパピロン

すると、長いなにかが輝きを放って現れる。それを握って確認すると愕然とした。

「……まさか当たり前のように入るなんてな…『刃アロンダイト毀れを知らぬ剣』」

デユランダ
アロンダイト

絶世の名剣と一、二を争う名剣のひとつである刃毀れを知らぬ剣。

女が付与してくれた能力はしっかり起動する。

この分なら、エクスカリバー約束された勝利の剣もちゃんと入っているだろう。安心した俺はアロンダイトを戻した。

安心した俺はアロンドイトを戻した。

そして次に必要なのは寢床。なければさすがに死ぬ。

……が、どうしようか。正直なところ（ヒラリ）おっと何かメモが。

『仮住居⇒海鳴市南青山三丁目12-10 謎の美女より』

ちよ、美女で。つかなんてご都合主義。まあ今回はそれに乗っかる
としようか。

俺は住所が示す場所へ向かうことにした。
ナビ？魔法でチョコチョコイのチョコイやで！

ナビ？魔法でチヨチヨイのチヨイやで！



ここは示された住所にあったアパート。それなりに綺麗で、なぜか自分の表札もかかっていたので見つけるのはたやすかった。

「うん、ごちそうさま」

カップめんを食した俺は、とりあえず布団の上に寝転がった。

「しかし驚きだな…質素とはいえ生活には困らないようになってるし」

食料も、当面は困らないようになっていた。しかし、どの道自分で稼がなきゃなくなる。そうなった場合、自分で変身魔法をかけてアルバイトか…………。

いや、そんなことを考えるのはよそう。
まず考えなければならぬのは…女の発した言葉だ。

ヒントとして、女は魔法少女、闇の書、守護騎士、時空管理局と言った。

そしてここの住所。

「海鳴市……」

生前に貯めたアニメの知識を総動員させて、この単語が関わる作品

を探し出す。

無論、その答えはすぐに出た。

「魔法少女、リリカルなのは」

高町なのはが、魔法を通して仲間と出会い、敵と対峙して己の想いをぶつけ合う熱いアニメ。

つーことは、今俺はリリカルなのはの世界にいるのか。

なんでリリカルなのは？と思ったが、それはどうでもよかった。

つまり、魔法少女は高町なのは。

となれば、闇の書と守護騎士ってのは八神はやたとシグナム達ヴォルケンリッターだろう。

ここで、現在の時間軸はA'sだと判断した。

そして時空管理局。こいつは…高町なのはが現在進行形で協力してる組織だ。そしてこの世界で絶対権力を握る。

そして命令は、『蒼く澄んだ瞳の少年を探せ』。

全部照らし合わせたら、全員と何かしらの関わりを持ってということなんだろう。

関係を持つってのはこれらのキャラと何かしら接点を持ちさえすれば簡単だけど……………。

「問題は、最初に誰の陣営に付くか」

A's においての主な陣営は三つ。

一つ目はなのはら管理局。

二つ目ははやてらヴォルケNZ。

三つ目はギル・グレアムのとこだがまずこの選択はない。

原作に忠実になるなら、最初なのはらが負けるようにするためにはやてらに付くべきなんだが：これから先を考えたら、なのはらに付いた方が人間関係的に有利だ。

……まあ人間関係つつかハーレムには興味ないし。なっちまったらなっちまっただ。

それに、なのはとフェイトの最強コンビは自分の能力を試すには絶好の機会かも知れない。

「：明日は図書館行ってみるか」

あそこなら、必ずはやてに会えるはず。
そう決めて俺は寝た。

第2話 行動

次の日。疲れていたからか、昼前後に起きた俺はかるく昼食を済ますと海鳴市の一番大きな図書館を目指していた。

理由は簡単、最初は八神陣営から始めようと思ったから。

え、管理局側なら楽じゃね？とか思う人もいるけど、それではいきなり原作ブレイクすることになる。それは原作者として正直回避したかった。・・・だけど、回避できる悲劇は回避したいかな。

というわけで、目指す先は八神はやてがよく利用している公立図書館。とにかく、出会ってから勢いでやっていこうと思った。

ちなみに身長は132cmくらい。同学年ではかなりでかいほうだろう。

……まあ、どうせ小さいですようせ。

「さて、ここか」

なんだかんだ話していたら、もう図書館が目の前に見えていた。

…分かっていただけ、でかい。

これは…自分が住んでいた街の図書館よりでかいんじゃないか？

「……寒ッ」

思えばA，Sは秋が深まる季節。昼時とはいえ、寒くなるのでさっ

さの中に入ることにした。



中に入った俺は、蔵書の量にまたしても驚かされることになる。

専門書や文献はもちろん、童話や最近の雑誌に文学小説、果てには漫画やラノベまで置いていた。

：漫画に関しては、魔法少女リリカルなのはに関するものは全くないということ以外変わりはない。

「うわ……ほんとになんでもあるな……。こっちにはバカテスに禁書録に超電磁砲：ライディーンとか誰が読むんだよ」

とか言いながら読んでしまうのがオタクの性。

元いた世界ではまだ売り出されていなかったものを手当たり次第に読んでいく。

少年熱読中……

「く……っ、まさかの自己犠牲かよ……泣かせてくれるぜ」

八神はやてに会うことも忘れて、漫画を熟読していた。

ふう、と本を閉じて壁掛け時計を見ると……

「ゲッ、閉館30分前!？」

ヤバイ! 本を読むと時間を忘れるというのはよくあるけど尋常じゃないぞ!？

急いで本を閉じて周りを早足で歩き回る。

すると、すでにお目当てのものを手に入れたのか、はやては小さい赤髪で三つ編みの女の子：間違いなくヴィータだな：が図書館から出ていこうとしていた。

見つけるが早し、追い掛ける。ヴィータから自らの魔力を察知されないように、強度の認識阻害魔法をかけてから追い掛ける。

これなら、普通に歩いていてもばれることはない。

どうせバレないなら、ちよつと並走してみるか。そう思った俺は、自然な感じではやて達に並ぶ。

「はやて、今日は何借りたんだ？」

ヴィータが車椅子に腰掛けたはやてに問い掛ける。

「ん？今日はちょっとした童話だけやよ、ヘンゼルとグレーデル。」

帰ったらヴィータに読んだげるな」

「ありがとう、はやて」

とても他愛のない、日常的な会話。そうすると……。

「ちょっとお嬢ちゃん。ボク達と遊んでいかないかい？」

「お兄ちゃん達が楽しいこと教えてあげるよ」

えー、なにこのテンプレ展開な感じで、チャライお兄ちゃん達のはやてとヴィータに絡んできた。まあ9歳とはいえ素材がいいしな……って感心してる場合じゃない！

「ほら、行こうぜッ」

「きゃー」

「おいテメエはやてに気安く触んじ」ロリコンかテメエら!!」って誰だよ!!」

ごめんよヴィータ。こんなロリコンヤンキーには我が秘伝の最終奥義をだすしかないんだよ。

「え、キミこのコのガールフレンド？」

「ヒューカッコイイー（笑）」

ギャハハハハと下品な声で笑い出す。

いいぜ……ガキがガキ通りの能力通りだと勘違いするなら、その幻想をフレンドぶち壊す!!

「で？ボウヤになにか出来るの？」

「みっちゃんやめてやれよ、コイツびびっぎやあああたたあああ
!!!!」

俺の渾身の崩拳を叩き込んでやった。モチロン、手加減ハシテマスヨ？

みっちゃんとかやらを吹っ飛ばしたためか、周りのヤンキーが激昂した。

「テメエ！（バキッ）がはっ！！」

「よくもやりやがったな！？（ドカッ）ゴハァ！！」

ザコ共が！テメエごときが俺に勝てると思うな！…まああの女のおかげだけどさ。

で、助けられたはやてとヴィータは。

「……………」
「……………」

若干引いていた。
当然の反応だ。

「えと……大丈夫？」

「大丈夫やないな……後ろのお兄ちゃんらが」

まあ素手の全力で殴ったしな。少なくとも内出血は免れない。

「オマエ……体に異常があるんじゃないか？」

「大丈夫、昔から体は丈夫なんだ」

「まあなんにせよ、助かったわ。ありがとな？」

「いいえ、どういたしまして」

ぐあ、可愛すぎる。可愛すぎるぞはやて。って待て！断じて俺は口
リコンじゃない！

「えと、良かったら送っていいとか？またあんなのに襲われたらど
うしようもなさそうだし」

「んー……せやな。せっかくやしお願いしよか」

「でもはやて……」

「それにヴィータも公にはやれんやろ？」

公にやれない……無論鉄槌の騎士の力だろうな。あれを使えばあんな
のは簡単に潰せるだろうけど、一般人には使っちゃまずい。もちろ
ん、あえて気にしないことにした。

「せやから。お願いしよ？せっかくかつこええ男の子がボディーガ
ードやってくれるんやから」

「……分かったよ、はやて」

ヴィータは渋々頷いた。それを見てニツコリと笑ったはやてはこちらを見る。

「ほな、お願いな？えと…」

「舞阪千里。千里でいいよ」

ちなみに苗字は本来の苗字から変えた。昔の苗字は面白くないし…名前を変えなかったのは、やっぱり腐っても親から貰った唯一のもの。愛着はある。

「私は八神はやて。はやてでエエよ。こっちは…」

「ヴィータ」

「じゃあはやてにヴィータ。よろしくな」

こうして、八神家に行くことになった。

第2話 行動（後書き）

はい、第2話でした。

一話一話の短さは、勘弁してください。

駄作ですが、これからも魔法リリカルなのはRewriteをお願いします。

第3話 いや、こんな展開じゃなかったよな（前書き）

実はA，Sはおぼろげにしか見てません。

ごめんなさい。

第3話 いや、こんな展開じゃなかったよな

で、俺は八神家のリビングにいる。うーん・・・大丈夫かな・・・。魔力もちばれないかな・・・。主にシグナム姐さんとシャマルさんに。

「それでなー、この千里くんが格好良く現れてチンピラたちをやっつけたんや！」

こう・・・ばこーん！てな・・・と、興奮しながら身振り手振りをつけて、シグナム達に説明するはやて。

よっぽど助けてくれたのがうれしかったんだなと、俺はちょっと嬉しくなる。

「そうなんですか・・・千里くんありがとうございました」

シャマルは深々とお辞儀をした。

「いえ、僕もちょっと怖かったですけどねー（副音声…余裕過ぎてハナクソが出そうでしたけどねwww）」

「別、こいつが出てこなくてもあたし一人で倒せた」

「もう、ヴィータは意地っぱりさんやな」

「べ、別に・・・」

おーおー。顔赤くして顔そむけちゃって。動揺が見え見えですよ。それを軽く見届けて、はやては車いすを動かす。そしてキッチンに向かいながらこちらに向かって声をかけてくる。

「ほな、夜ご飯作るなー。よかったら千里くんも食べてってや？」

「い、いいのか？」

「うん、千里くんが良かったら泊まっていいんやで？」

いくらなんでも助けただけでそんな優遇されていいんかね？という
かり歳とはいえ男なんだけど。とりあえず、シャルとシグナムに
視線を送って見る。

「私がかまわないですよ♪」

「私も、主はやての命ならば」

「なんでだよシグナム。こんな胡散臭いやつ泊めていいのか？」

「主の命を聞けないのか？」

「いや、はやてがいいんならいいんだけどさ・・・」

そこでヴィータがどもる。少し怪訝に感じたシグナムは顔をしかめ
てヴィータを見つめた。

・・・やばいな、ヴィータのやつ俺の身体能力疑ってるな。魔法は
使っていないけど、身体強化魔法はばれないように詠唱破棄でかつネ
ギまの『戦いの旋律』メローディア・ペラークスを使っておいたんだが・・・魔力は魔力って
事か。成分が違ってものなにかを使ったのは感じ取れるんだという事
が分かった。

「まあ、なんにしても客人だ。もてなすぞ・・・ふむ」

「舞阪千里です」

「よろしくな、舞阪」

シグナムはあえて苗字で呼ぶのか・・・思えばなのはは高町、フエ
イトはテストロッサ一辺倒だったな。

それはどうでもよくて、その時のシグナムの目が戦士を見るような
目だった。

てやるなんか言ったら原作がいつきにおじやんだ。

「くあ・・・」

「はやてちゃん、眠たいんですか？」

「ん・・・もう10時なんやな。ほな、私は寝る準備するわあ・・・」

ふわあ・・・と、かわいらしい欠伸をしながら、はやては車いすを動かしていった。それを介護するためにシャルが追いかける。

・・・その時、何かしらの結界が張られた気がした。

この魔力の感じ・・・シャルか。離れたと同時に結界が作動する術式を組んだようだ。それに呼応して、騎士服姿のシグナムとヴィータが飛び込んでくる。

「・・・9歳の子供にいきなり剣を向けてくる騎士がどこにいるのやら」

「悪いな、ここにいる」

と、レヴァンティンの切っ先をのど元に突き付けてきたシグナム。ついでにヴィータもグラーフアイゼンを担いでいる。

「オマエ、はやてを助けるときに魔法使ったろ。それはその辺の身体強化魔法程度のものは言え、アタシ達が見たことない術式だった」
しかもしっかりばれてるし。

「貴様は何者だ？何の目的があって主ははやてに近づく」

一触即発の雰囲気です。接してくるシグナム姐さん。うーん・・・安い嘘は命を失いかねないな。

「あの子を助けるためだ」

「われわれで事足りる」

だろうな。シグナムはそういう性格のはずだ。

「だけど、それが切羽つまつてるのは事実なんだろう？下手をすれば今年中に死ぬ」

「！・・・それは」

「ここに来て初めての友達になれそうなんだ・・・それに、救える命は救うべきだ」

「・・・信用しろと？」

「信用するかはお前ら次第だ」

「アタシは信用しねーな」

「胡散臭いからか？」

「それもある。だけどお前にそれをできるだけの力あんのかよ」

ふむ・・・こいつからしたら未知数の力だもんな。それならちょっとだけ気合入れてみるか。

軽く、魔力を解放する。すると尋常じゃないほどの魔力の奔流を生んだ。

ちなみに俺は・・・膨大な魔術回路にネギ親子ですら到底適わない魔力、そして世界最高峰のリンカーコアを有している。これだけありゃあ信用を勝ち取るだけの魔力は十分すぎるだろう？

「これは・・・」

「どうだ？これだけありゃいけるだろ。なんなら、魔力を闇の書に食わせてやるよ」

「・・・そこまでして貴様にメリットはあるのか？いくら主を思っ
ての行動とはいえ・・・」

「俺ははやてを救えたら十分だ」

シグナムはしばし考え込む。その末出した結論は。

「・・・わかった。貴様がいいというのなら、協力してもらおう」

「オーケー。もちろんはやてには秘密だぞ」

「無論だ」

というわけで、シグナムらと協力して蒐集を行うことになった。と
いうか・・・。

「もしかして今から行くとか言うんじゃないだろうな」

「あ？今からに決まってんだろうが」

という事はもう蒐集がはじまってんのかよ！ならここは少なくとも
10／27以降の話か。

「ん、じゃあ行こうか」

「ああ」



そんなわけで、名も知らぬ世界に来ちゃってます。藤岡弘がここで
探検していても絶対不信感を抱かないような密林にいったい何があ

るんだよ？

「で、ここにリンカーコアを持ってるやつがいるのか」

「ああ、そうだ。少なくとも5は反応がある」

レヴァンティンの柄に手をかけながらしゃべるのはシグナム。今回は初めてという事でシグナムだけが付いてきてくれるそうなの。しかし人っ子一人いない。さりげなく感じる不快感を無視しながら

散策していると、突如魔力が増大するのを感じた。

「来るぞ！！」

シグナムの言葉で散開する。すると、数瞬おいて元いた場所に大きなクレーターができています。

回避しながら地面を穿った敵を確認すると、なんかFFの結構終盤に出てきそうな魔物がいた。

「アバドン……」

FF9に出てくるカマキリっぽいそいつは、体勢を立て直すと、すぐさままいたちを放ってくる。俺は万難排す魔除けの楯で防御したがシグナムは。

「はぁ！！」

ぶった切っていた。おいおい、いくらなんでも暴挙じゃないか。

「いつの間に盾をだしたんだ！？」

「こいつが俺の能力なんでね。こいつは俺がやるから下がってろ」

「しかし」それに、俺の実力を見たいだろう？」くっ……」

しぶしぶと、シグナムは下がる。よし、では行こうかね。

「来い、『雨叢雲』」
あめのむらくも

名前こそ日本名だが、実態は西洋型の剣。ヤマタノオロチを討った際に出てきた剣で、その力は日本の宝具では非常に強力な剣だ。それを振りかざして、アバドンに斬りかかる。が、右のカマで受け止められた。

「グギャアアアア！」

うげ・・何度聞いても不快感を煽る鳴き声だ。雨叢雲で正面から受けた後、うまく受け流してアバドンの懐にうまく入り込んだ。さて、試しなかった剣技をここで出してみますか！

そう考えた俺は剣を縦に構えて魔力を溜める。思い切り溜めてもいいんだけど、溜めている間に攻撃を受けるわけにもいかないからすぐに解放した。

「ショック！！！」

ずがああああん！！！！

すると、アバドンが粉々に吹き飛んだ。・・・いやあ、いくら圧縮魔力を1点で思い切り解放する単体攻撃があんなに破壊力抜群とは・・・。恐れ入った。

「なんて無茶苦茶な・・・」

シグナムもむちゃくちゃ引いていた。ごめん、やりすぎた。

結局、5匹のターゲットは俺が全部片づけた。

第3話 いや、こんな展開じゃなかったよな（後書き）

千里「……で、非常に頭の悪い展開だったな」

作者「さーせん!!」

千里「で、A・Sもぜんぜんと」

作者「う……」

千里「まったく。そんなでよくA・Sから書こうなんて思ったな」

作者「しょうがないじゃないか……書かないと置いて無駄に練った原作をベースとしたオリジナルの展開考えてたし。それにはどうしてもここから書く必要があったんだよ」

千里「まずはA・Sを見ろ!」

作者「大丈夫、細かい描写はともかくあらすじはなんとか押さえてるから」

千里「さいで」

作者「それではこんな駄作を読んでもくださった方には多大な感謝を。それでは次回はなのはsideにも介入します!」

第4話 介入

それから守護騎士の収集を手伝い終えた俺の今日の宿は、そのまま八神家のお宅になった。

その際の部屋割なんだが……………。

「別にザファイラとリビングで寝てたらいいだろ」

「それは酷い仕打ちよヴィータちゃん！はやてちゃんを助けるために協力してくれてるのに！」

「コイツ男なんだから一緒には寝れないだろーが！」

「……………そもそも、我等は防衛プログラムに過ぎないだろう」

ヴィータとシャルが無茶苦茶揉めた。端からちよつとだけザファイラが口を挟んだがスルーされている。

「なあ、ヴィータっていつもあんななのか？シグナム……」

「……残念がらな。主はやてには懐いているんだが」

やれやれこれだから末っ子は……………といった感じでかぶりを振るシグナム。

なんかこれを見ると……あれだ、シャルが優しい長女でシグナムがクールな次女、ヴィータがやんちゃな三女なんだな。そいではやてがお母さんでザファイラがペットみたいな。

後今はまだいないリインフォースが老婆ちゃんで、リイン？が末っ子。

要約すると……………団子大家族ならぬ八神大家族。

やべえコレツボツたWWW

一人で妄想したネタで腹を抱えて笑いを押し殺していると、シャマルがこちらまでやってきてしゃがみ込んだ。

「どうかしたの、千里くん？なんかピクピクしてるけど…」

「だ、大丈夫……笑い堪えてるだけだから」

「何もおかしいことないのに、笑ったのか？変なヤツ」

ヴィータが呆れたようにため息をついた。

いやそれがね、三女よ。私めが考えた八神大家族ネタがですね……

「ブハッWWWゴハア!？」

吹き出したらヴィータにグラフアイゼンで鳩尾を強打された。

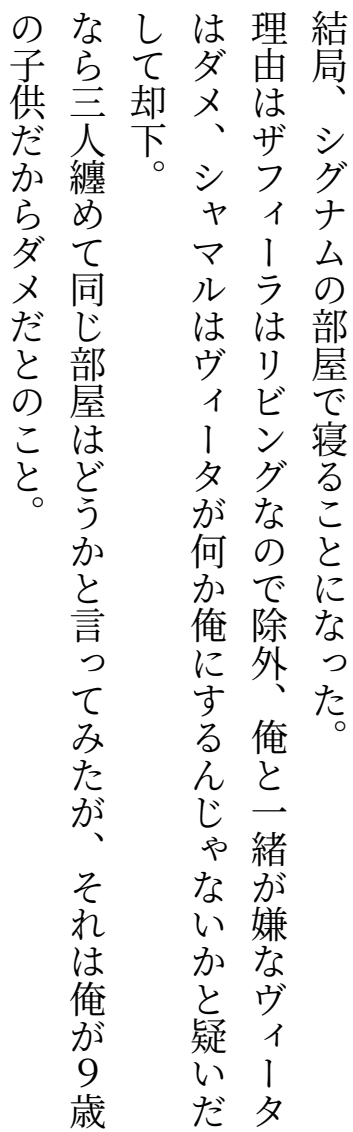
「テ……メエ……ッ」

絶息してまともに話せねえ……!つかいくら俺でも生身でグラフアイゼン強打は死ぬわ!!

「今すげえ馬鹿にしたこと考えてたろ」

「め、滅相もございません……」

でもいつかはネタにしたいと、そう考える俺でした。



「まあ特に置くものなどないしな」

「とうか一人で寝てる？」

「まあ、な。覚醒当初はみんなで寝ていたんだが、主はやてが、な」

「……………分かった。言いたいことは分かる」

シグナムが自分の胸を見ながら言った時点でそれははやてのセクハラを単に嫌がったということだ。

「……貴様はさすがにしまいな？」

「いややったら犯罪だから。女の子同士だから許されるんだよ」

まだ俺は死にたくない。

そんなこんなで寝た。

え？ラツキースケベなんてありませんけど何か？



それからしばらくはどういうわけか八神家で延々お世話になっていた。

はやては親に心配かけてるんじゃないかと心配したが、その辺はシヤマルがごまかしてくれた。

もちろん、蒐集のお手伝いもしている。俺が宝具を出す度にシグナム達には驚愕の目で見られた。

曰く、『貴様バクだろ』。

バグですよー、謎の女の差し金です。

そんなある日、ヴィータがはやてがシャマルと買い物に出かけた頃を見計らってシグナムと俺を呼んだ。

「どうしたんだよヴィータ」

「昨日この街でデカイ魔力反応を捉えた。推定AAA」

そいつは間違いなく将来の魔王、高町なのはだな。もちろん口には出さない。

「ふむ……意外だな、そういう奴がいたとは」

「それで、どうするんだよヴィータ」

「もちろん、リンカーコアから魔力をいただく。あたしがやるからな」

やる気満々だな、ヴィータ。シグナムはふむ、と頷いた。

「分かった。ならばおまえに任せる」

ヴィータは分かったと言わんばかりに服装を騎士服に変える。
グラーファイゼンを担ぐと、そのまま空へ飛んだ。

「……………」

「ん？どうした舞阪」

「いや、なんでも」

しかし俺としては魔王とエンカウントはしておきたい。

……よし、スキを見て「心配か？」ぐあ………。

「ま、まあ…なんせ能力的にはヴィータと同じだから」

「確かに能力はヴィータと同程度だ。が、本当に実力は同程度か？」

アンサーはノー。だが、なのはにはお話聞かせてがある。スターライトブレイカーそれを考
えると、少々不安だ。

「けど、有り得ないことは有り得ないから。だから心配だ」

「フツ……優しいな、貴様は」

ぐりぐりと頭を荒撫でしてくるシグナム。ちょ、痛い痛い。

「そんなに心配なら、しばらくしてから付いていくといい。その代
わり、ばれないようにしろよ？アレはアレでプライドがあるからな」

「分かってるよ」

そう言うと、俺は自分にステルス魔法をかけるとフライヤーフィン
でヴィータが向かった先を追い掛けた。



「諦めな。助けなんかこねーよ」

あたしはアイゼンを構え直した。

あたしが捉えた反応の持ち主は確かに栗毛のこいつだ。だけど、意外とデキるやつだった……。なんなんだよあの有無を言わせない砲撃。ちよつと貫っちまった。

まあいいや、とつとリンカーコアを頂こう。

そう手を伸ばした瞬間————

『ハアッ!!』

「なっ!？」

突然だった。栗毛の前に魔法陣が現れたかと思うと金髪が出てきた。まさかの展開だ……。間に合うか!？

「やらせるかよ」

ガキンッ

「ッ!!」

それを誰かが受け止めた。

それを見て金髪と栗毛が驚愕していた。あたしも驚愕していたと思う。

だってそいつは、家に置いてきたはずの————

「悪いな、こいつは……やらせねーよ」

舞阪のヤローだった。

第4話 介入（後書き）

作者「はい、第4話でした」

千里「そしてようやくまともなバトルか…」

作者「予定よりかは早いかな？戦う前になのはと絡み用意したけど省いた」

千里「まじかよ……………」

作者「さて、読んでくれた人には多大な感謝を。次回予告はついにフェイトとの初バトル。見知った以上の機動力に千里は！？」

千里「次回も楽しみにしてくださいな」

第5話 激突！VSフェイト

ふう。なんとか間に合った。しかし、さっきのを見てるとヴィータのやつ間に合ってなかったな。

やっぱり本当に紙一重のタイミングだったんだな。

「オマエ・・・なんで・・・」

「なんでってそりゃ仲間の心配して悪いかよ」

「アタシ一人で十分だっつーの!!」

くう・・・ツンデレ。可愛いけど今は戦闘だ。気を確かにしないと。

「私は時空管理局嘱託魔導師フェイト・テストロッサです。危険物所持と一般人傷害の罪で逮捕します」

「断ると言ったら？」

「・・・実力行使です!!」

そう言って間髪入れずにバルディッシュで斬りかかってくるフェイト。もちろん俺は当たるはずがない。ついでにヴィータをひっつかんで空域離脱した。

「って当たり前のようにつかむな!!」

「ンなこと言ったってお前連れなきやお前が捕まるだろうが!!」

「それは・・・そうだけどよ・・・」

なんかどもるヴィータ。全く素直じゃないな・・・ってもう追いつきやがったか!!

「下がってろヴィータ!!」

そう言って俺はとっさに投影した干将・莫耶で受け止めた。くそっ、意外といい攻撃じゃないか！

「はあああああ！！！！」

「ちっ！！」

そのまま斬撃の応酬をする羽目になる。隙を見つけては狙うが、こいつの持ち前の速さで全部躲される。

「ヴィータ！！」

「なんだよ！！」

「シャル近くにいろんだろ！？俺がこいつら惹きつけておくから今のうちにリンカーコアの魔力を闇の書に食わせろ！！」

「バツ、相手はA A Aの魔導師だぞ！？」

「大丈夫だ、俺を信Z「させない！くそっ！！」

だああああ、なんでこいつは話の途中で！！・・・まあ俺もそうするけどよ。話を邪魔されるってこういう気分なんだな。

「・・・ったく、負けんじゃねーぞ」

「わかってる」

諦めたヴィータは前線を離れた。それを見届けた俺はフェイトに向きなおった。って、ユーノとアルフもやってきた。こいつは厄介だな。

「3対1。君も、この状況はわかるよね？」

「まあ、俺はピンチだな」

「・・・なら、無駄な抵抗は「かといって諦めると思ったか？」な

!？」

「先ずはお前の動きを縛る！」

干将・莫耶を戻し、俺は拘束魔法で縛った。術式は適当に組んだので名前とかはまだ決めてない。

「なっ、無詠唱でこんな尋常じゃない硬さなんだい!？」

「はっ、俺をなめるな!！」

「アルフ!!このおおおお!!」

おいおい・・・アルフが動けなくなっただけでヤケになるなよ。おかげで太刀筋が見え見えだぜ？
攻撃があまりに素直になり始めたので攻撃をよけるのは簡単になった。それでも攻撃を当てにくいのは相変わらずだけど。

その時、俺の両腕を緑の鎖が縛った。この魔力光・・・ユーノか。

「悪いけどこれで動けなくさせてもらうよ」

「これで縛ったつもりかよ」

あっさりとハンドブレイクして自由の身に。それでも若干のタイムラグができてしまい、フェイトに攻撃の隙を与えてしまった。

「ハーケン、セイバー!！」

自動追尾型の魔法、ハーケンセイバー。避けても追いかけてくるのは厄介だな・・・なら。

「来い、無^{アロンドイト}毀なる湖光」

かの約束^{エクスカリバー}された勝利の剣と対をなす、刃毀れを知らぬ神造兵器。そ

して竜殺しと親族殺しの魔剣。

このアロنداイトを振るい、ハーケンセイバーを砕いた。そのまま驚愕するフェイトの隙について背後に回り、蹴り飛ばす。

「ああああ!!」

「フェイト!!」

あ…やべ、やっというて可哀相とか思ってしまった。だって女の子だし。

とか言ったらヴィータから念話が来た。

（おい、千里!）

（どうしたヴィータ）

（魔力はきっちり頂いた。もう大丈夫だからさっさと逃げろ!）

（は? どうし———）

……待てよ? 時間的にはもうなのはの魔力はある程度回復している。そして準備時間はきっちりあった。

そして………脳裏にちらついたのは、アニメのあのシーン。

「く、間に合うか!」

「ま、待て!」

魔力の尋常じゃない集束を感じた俺は、すぐさま転移魔法で逃走す

フエイトがなんか言ってたけどスルーだ！

この話は後程フェイトから聞かされることになる。

Side
Kuro
no

くそっ、なんなんだ一体！

なのははやられ、フェイトとアルフは為す術なし、さらにはユーノのバインドも素手で壊された。

極めつけはあの少年が持つ稀少技能とおぼしき能力。

……武器を自在に出し入れする、しかも計測では何かしらの能力が付与されていた。

「強敵……なんかじゃ生温い……」

あとKYな男とかクソ真面目とか言うツツコミする奴はエターナルコフィンで凍付けだッ!!

『……クロノ？よく分からないけど、変な心の叫びが聞こえたよ？』
「気にしないでほしい……。フェイトにはまだ早い世界だ」
『？』

ああ、フェイト。そんな可哀相な目で僕を見ないでくれ。

『それよりクロノ。彼等の事だけど』

「ああ。映像は確認した……なんなんだアレは」

『分からない……。あの茶髪の男の子は武器を一瞬で出し入れして、瞬時に対応してきた』

『私の砲撃も、当たる直前の一瞬でかわされて逃げられたの』

『それは多分転移魔法のひとつじゃないかい。一瞬だったから少量だけど魔力を感じた』

「フェイト、少年の武器の出し入れに何かしら異変は感じなかったか？」

『分からない……。ただ、最初に出してきた黒と白の剣で攻撃を止められた時には何か魔力防御に似たものを感じたよ』

ふむ……。さっぱりにも程がある。情報が足りなさ過ぎる。こちらについても、調査が必要だな。

『分かった。フェイトとアルフはある程度回復したらアースラに戻

「で、大丈夫なのか？千里」

「まあ、なんとか」

心臓はバクバクだったけどな。転送先から自分がいた場所見たら、スターライトブレイカーが通過していたんだから。

「ヴィータこそ大丈夫なのかよ」

「アタシは大丈夫だ」

……顔を逸らしながら言われても説得力はないぞ。

（舞阪）

（どうかした？シグナム）

（いや、あの金髪の子供はどうだった？）

……バトルマニアめ。仕方ないから率直な感想を述べた。

（素材だけで言えば最高峰だろ：パワーはシグナムに負けるけど、速さは圧倒的。将来は間違はなくエースだ。：しかし悲しいかな、あいつは性格が戦いに向いてない。仲間がやられて激昂するし、不足の事態にいちいち驚きすぎ。まったく、もったいないったらありゃしない）

元々ああいう奴らの方が戦いに向いていないんだよな。戦いに立つなら冷静であれ……戦場の基本の一つ。

正義の味方気取りはいつか自分を滅ぼすつてのもののFateの赤い弓兵アーチャーも立証している。

（そうか……貴様も案外甘い奴だと思いがな）

（え、結構殺気は持ってたけど？）

（あれだけ分析しながら、本気で戦えるか？）

まあ…アニメを見たという名の未来予知を持っていますから。全部と
は行かなくてもある程度は覚えている。

（まあ、いい。戦える時を楽しみにしよう）

その声音は、心なしか久々の強敵に燃える剣士のようにであった。
正直に言う、とぼっちり受けそうな気がしてならない。

「っ？」

と、そこで僅かに腕に痛みが走った。

見てみると、若干腕が小さい火傷を負っていた。捉えきれなかった
時に付けられた傷か？

「……なかなかやるじゃないの」

いかにチートと言えど、しっかり扱い切れなければただの無駄って
ことかよ。なら……やってやるさ、この世界を変えるまでになっ
！

第5話 激突！VSフェイト（後書き）

千里「最後セリフがクセエよ。つかチートのくせに傷つくとかダメじゃん。チートは自重しないからチートなんだぜ？」

作者「世の中そんなに甘くないー♪」

千里「テメエ！！」

作者「ちなみに案外作者はリアル多忙であんまりアニメ知識ないんですよ。チート能力に圧倒的偏りとかあからさま間に合わせネタが出るのはご了承ください」

千里「バカだろ。フェイト縛った魔法も名前無しだし」

作者「……………反省しています」

千里「それでも読んでくださった方には多大な感謝を致します。本当にありがとうございます」

作者「さて次回は。ついに魔王らとプライベートで遭遇……………そして、そこで何を語らうか。もしかしたら千里スベック挟むかも」

千里「えー……………。まあ次回も読んでくれよ！」

舞阪 千里スペック

作者「と、いうわけで…。今回は主人公スペックを曝そうかと思えます。それに連なって舞阪千里誕生秘話でも」

千里「どうせ大したことないんだろ」

作者「う…っ」

千里「てか、王の財宝って武器の真名解放出来ないよな」

作者「だからしてないじゃん。いずれするけど」

千里「オイ!!」

作者「原作の破綻はあまりしてないけど？あの中に入っている財はギルの財宝庫に入っていたもののように、お前の財は生前にお前が頭に貯めたアニメの知識から連なる武具ないし希少物だから………というのは半分嘘で、謎の美女のオプションです」

美女「くっくくっく………感謝なさい」

千里「こじつけどな。まあそのおかげで出来ないことが出来るからいいけど」

作者「えー、というわけで、現時点での明かせる主人公二人の設定と能力を公開します」

まいさか
舞阪 千里^{せんり}

身長 132 cm

体重 28 kg

魔力総量 EX

使用デバイス…現在なし

能力1…宝具生成

古今東西あらゆる宝具の使用と格納が出来る能力。千里が生前見聞
きた創作武器—（例えばゲームに出てくる武器や、アニメで扱わ
れる現行兵器のオリジナルカスタム）なども扱えるが、能力を授か
った時点で千里が知識を持たない宝具は格納されていない。

なので、そういった宝具を新たに創作する場合は、能力に比例した
魔力が必要。

マジシャン・オグロリー
能力2…魔導師の栄光

宝具生成の魔法版。古今東西あらゆる魔法及びそれに連なる非科学
的な事象を己の魔法として記憶し、使役する能力。その目で見た魔
法も、どういった効果を現すか等簡単に分かっているれば即興で撃つ
ことも可能。

しかし神の領域を犯す魔法—（死者蘇生など）は使用出来ないし、

術式の設定が前提としてある魔法は術式を設定しなければならない等、それなりに制約はある。

能力3…????

見た目…Rewriteの天王寺瑚太朗の瞳をキリツとさせた感じ。瞳は澄んだ黒。

性格…一言で言えばおおらかで、誰にでも優しく接する。瑚太朗みたいなへらへらした感はない。

ただ、若干正義の味方のような行動を取ることも。

千里「????ってなんだよ」

作者「まだ本編で使ってない能力。使ってないのに公開するのはネタバレ」

千里「さいで。まあ術式うんぬんは面倒だな」

美女「制限をつけるからここまでの能力を与えられたことは分かって?世界は等しく揺れ幅を許しているけれど、それを超えれば世界は崩壊するのよ?」

千里「……………すみませんでした」

美女「分かればよろしい」

作者「それでもう一人の主人公、未だ名を明かされない少年の設定はこちら」

名前…?? ??

身長…130半ば

体重…30前半

デバイス…非人格の両刃剣

能力…???

見た目…ガンダムWのヒロの瞳を若干柔らかくした感じ。しかし、現在その面影はプロローグでは感じられない。

性格…???

千里「謎だらけじゃないか」

美女「彼を見つけなければ………貴方、死ぬのよ」

千里「契約が違う!! しかもすげえ深刻な顔してる!!」

作者「実は一連の物語に深く関わってきますが、それはまた先の話。さて、これくらいにして誕生秘話なんだけど……………」

千里「うん」

作者「言うのやめた」

千里「待てよ！喋るんじゃないのかよ！？」

作者「いや、喋ったらネタバレになる」

千里「なら言うなよ……………」

作者「すいませんでした。ちなみに、こいつの名前……………JR時刻表の路線図眺めていてよさげな駅名を響きで繋ぎ合わせたポンコツネームです。ちなみに舞阪は東海道本線の浜松駅から名古屋より2駅目。千里は高山本線の富山から4駅目です。他にもいろいろ小説書きましたが、キャラ名は大抵駅名やJRの特急・急行から拾ってます」

千里「ヒデェ……………」

作者「職業柄しかたない。さて、次は必ず本編更新いたしますのでどうぞ期待！」

作者「……ところで、お気に入りが8件なんだけど。PVもなんか3500いってるし」

千里「お前のハナクソみたいな話作りが受けてるんだろ」

作者「読んでくださる方本当にありがとうございます。必ずや完結させますので……」

第6話 翠屋（前書き）

作者「なんかスペックあげたらお気に入りが4件増えたんだが……」

千里「……………」

作者「登録してくださった方、本当にありがとうございます」

第6話 翠屋

そんなこんなあり、俺はやっぱ八神家の厄介になっていた。

というかそろそろ帰ろうかとしたら、はやてに待ったをかけられてしまった。

「だめやだめや！千里くんはもううちの家族同然なんや！それでも帰るんゆーなら……………シグナムとシャルに—（性的な意味で）酷い事する」

「お願い千里くん。私、はやてちゃんがそっちの道に堕ちるのを見たくないの」

「私からも頼む……………もうしばらく住んでくれ」

……………なんて頼まれたら残らざるを得ない。とはいえ、俺もなんだかんだで八神家の暮らしにすっかり馴染んでしまっていたりする。

思えば仮染めの家庭とはいえ、ここは温かだ。今更あの一人暮らしはちよつと出来そうにないな……………。

が、今日は違う。

はやては定期通院の日でない。

シャルはもちろん付き添いで、ヴィータはザフィーラの散歩。つかザフィーラよ……………お前普通に犬みたい暮らししていいのか？

そしてシグナムは剣道の非常勤講師に出掛けた。

つまるところ、今日は守護騎士業がお休み。

俺が起きるのが一番遅かったらしく、起きた時には朝ごはんとはやての書き置きが残されていた。

テレビを付けながら、はやてが残した朝ごはんを食べる。今日も日常と変わらぬニュースをしていた。

「…………ヒマ」

今日ほど暇を持て余した日はない……………。大概この家には誰かいたし、なにか暇を潰す道具もない。

……………よし。

「翠屋に行ってみるか」

かの魔王を有する戦闘一家高町家の経営する喫茶店。

魔王とエンカウトするかもしれないけど、暇潰しとお土産を兼ねて訪れてみよう。

あ、声に出ていたか。つか生で見た桃子さん若すぎる。いくつだあの
人。

「いらっしやい！初めてのお客さんね？」

「ええ、まあ」

「そう…今日は何頼む？メニューはこれよ♪」

しかも凄く若々しい振る舞い…なんとなく若々しい理由がわかる気がする。

メニューはありふれた喫茶店だった。ソフトドリンクやコーヒー、
簡単な一品料理に洋菓子が並ぶ普通の品揃え。

「じゃあカフェオレとシュークリーム2つ。後持ち帰りでシューク
リーム一箱」

「はあい、ちょっと待っててね」

そうして桃子さんはキッチンに消えた。なんかそこから軽やかな鼻
歌が聞こえてくる…………。

美由紀さんもいつの間にか店前の掃除に戻ったらしく、店内にはい
なかった。

「……………」

「……………」

…………だから、魔王と二人きり。しかもすごいガン見してくる。

コイツが砲撃で最後に狙ったのは俺だ。間違いなく直撃コースだったのに、なんで避けられたのかみたいなの？
あるいはどうして敵がわざわざ敵地に足を踏み込んでくるのかみたいな感じなんだろうな。

(……………あのっ)

……………なぜ、話し掛けてくるのは。

(あの時、フェイトちゃんと戦った人だね？ どうしてあんなことするの？)

(……………)

(ねえ、聞いてる……………?)

(……………)

どうでもいいなら答えたいけど、正直話したくない。

話せばコイツは絶対助けようとしてくるし、なによりこいつらが追う闇の書に携わる事項だ。

(悪いけど、話したくない)

(でも……………もしかしたら私達に出来ることがあるかもしれない。
だから、お話聞かせて?)

上目遣いでこちらを見てくるのは。

……耐えろ、耐えろ俺。この笑顔はフェイクだ。この笑顔は一必殺O☆HA☆NA☆SHI聞かせて《スターライトブレイカー》のシークエンスに過ぎない……。

（じゃあ。せめて……お名前だけでも……）

（………舞阪千里）

（私は、高町なのはだよ）

（ああ）

知ってるとはさすがに返せなかったので、適当に返しておいた。すると、カランカランと翠屋の扉が開く。

「やっほー、なのは」

「なのは、来ちゃった」

「おじゃまします」

「フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん！」

「ってなんであたしより先にフェイトが出てくるの!？」

「ふええ!？」

「あ、アリサ」

「アリサちゃん落ち着いて…」

誰かと思えばアリサとフェイトとすずかだ。

なのはも俺の近くを離れてアリサ達の元へ駆け寄った。

と、同時に桃子さんがカフェオレとシュークリームを持ってきてくれる。

「はい、シュークリームとカフェオレ。召し上がれ」

「ありがとうございます」

どれどれ……………はむっ。

「……………ッ!!?」

「ど、どうしたの!？」

な……………なんなんだ、一体。このまろやかなシューの食感に甘すぎないクリーム。

しかもかじった時にどぼっと出るクリームがあまりない。こいつはまさしく

「スイート」(笑)なんて付けさせないわよッ!!」　　ったあああああ
ああつつつ!!!!」

「「アリサちゃん!？」」

痛つつつてええええ!!!!　テメツ、どこからハリセン出しやがった!!!!　つかなんで展開が読めるんだ!?!　サイコマンティスか貴様ッ!!!

「どこぞの緑のキモオタニートは大嫌いのよ」

今にも殺さんと言わんばかりの眼光を携えたアリサ。

……………やべえ後ろに仁王が見える。

(千里くん、大丈夫…………?)

(ああ…魔王の砲撃並に痛かった…………)

(だから私は魔王じゃないよ!!!　じゃなくて…………アリサちゃんミド

レンジヤイってアニメがあるんだけど、それが下ネタばかりで大嫌いなの)

(…………絶対深夜アニメだろ。つかなんでお前も知ってるんだよ)

(それは…………アリサちゃんが見たかったテレビと間違えて録画されたやつで…………)

(あ、ああ……………)

確かにあれは小学三年生には刺激が強すぎる。つか他作品ネタが多すぎてピー音満載な話もあったな……………。

※実在するアニメではありません。

「で？辞世の句は読めたの？」

「申し訳ございませんでした」

くっそう……………俺被害者なのに……………。

「…………ところでこいつ誰？」

「…………シバいてから言うなッ!!……………」

「わ、悪かったわね！で、アンタ名前は？」

「普通お前から名乗る」あ？……………舞阪千里」

ダメだ。アリサが怖い。

「ふうん、千里ね。あたしはアリサ・バニングス。こっちの紫の髪の子が月村すずか。こっちの金髪の子がフェイト・テストロッサよ」

「よろしく、すずか」
「こちらこそ」

すずかはにこやかな挨拶をする。が、フェイトは仏頂面で俺を睨んでいる。

まあ睨むよなー、メッコメコにしたし。下手に聞かれるのも嫌だからさっさと帰ろう。

「じゃあ、もう帰るわ」

「え、もう帰るの？」

「家族が待ってるし。あ、桃子さんシュークリームお願いします」

「はい♪はい、シュークリーム」

桃子さんからシュークリームを受け取ると足早に翠屋を出ようとした。

（千里くん！）

（どうしたよ）

（あの……また戦うことになるのかな？）

（…だろうな）

（そっか……でも）

（大丈夫。ここじゃ何もしないしする理由がない。だけど、お互いバリアジャケット着たら……敵同士だからな）

（うん……お話、必ず聞かせてもらうの）

（ま、頑張りな）

そこで、俺は念話を切った。

このシュークリーム。あいつら喜ぶかな。



—Side nanoha—

千里くんが帰った後、私はちょっとぼーっとしていた。

（次会えば、敵同士）

少しくらい話してくれてもいいのに……全然お話聞かせてくれなかったの。

（なのは）

（何？フェイトちゃん）

（あの人、この間の人だね。なにか話聞けた？）

（それが、あんまり話してくれなかったの。詳しいことは教えられないって）

（そっか……でも、絶対聞かなきゃね）

（うん…そうだね。千里くんも聞きたかったら俺を倒せて言っ
たし）

千里くんはきつと嘘を言わない。

ようし、絶対絶対ぜえええったい！千里くんからお話を聞くため
に倒すの！！



—Side senri—

「うわあ、めちゃくちゃ甘いなあ」

「ホントだ。一体どこで買ったんだよ千里」

「悪魔の家の喫茶店」

「悪魔？」

「「「ああー…」」」

はやては？マークを浮かべたが、他の守護騎士にはバツチリ通じた。

（つーことは高町ナントカに会ったのかよ）

（ああ。大丈夫、闇の書については話してない）

(ならいいけどよ………)

念話で物騒な会話。

でも、あのシグナムですら嬉しそうにシュークリームを頬張っていたんだ。

たまには買いに行つてやろうと俺は思った。

第6話 翠屋（後書き）

作者「はい、第6話でした」

千里「なあミドレンジヤイって……………」

作者「私が携帯小説で一番爆笑したギャグ小説だよ。ヤホーでググったら出るかもね」

千里「まあ人の作品だからおおっぴらに言えないけどな。さて、次の話はどういくんだ？」

作者「そうだなあ……………カートリッジを搭載したなのはらと再線かな。後は……………ふふふ」

千里「なんだよ不気味な笑いは」

作者「ふふふ。では読んでくださった方には多大な感謝を。また次回も読んでくださいね！」

第7話 なかなか進まねえorz

あくる日。

今日は蒐集の仕事があるシャルに代わってはやてと買い物に来ていた。

もちろん、シャルは上手いことごまかしたが。

「えへへー、千里くんと買い物やー♪」

「嬉しそうだな、はやて」

「もちろんや！だって初めての男の子とお出かけやし、千里くんと外おるんは初めて会^おうた時以来やろ？」

まあ喜んでもらえてなにより、なんだけど。それはつまるところ逢い引きというやつで……。隣にいる女の子は、

「ん？私の顔になんかついとる？」

将来機動六課隊長になる八神はやてさんです。

二次創作で変態扱いされるわ莫大な魔力を携えているのに能力柄なのフェイの影に隠れてしまう悲運の女の子。

けど……………ショートヘアにおおらかで着飾らない性格が可愛いんだよ。こんな女の子に好意を持たれるってこんな嬉しいことって痛い痛い！誰だよ石投げた奴！！

「いや、なんでもないよ」

「うーん？変なの」

見とれていたなんて言えないから。

「で、どこ行くんだよ」

「んーとな、ツヤスコや」

おい誰だ某書き換える物語のパクリとか言ったやつ。しょーがないだろ、マイナスイオンだかなんだかグループに近い響きの単語って限られるじゃん？JRがNRとかSRとかに変わるのと同じ。マガジンがマガニヤンになるのと同じなんだよ。

分かる？いくら大衆に晒されたものでも使ったらキャンキャン言う連中もいるんだよ？実際某書き換える物語で飲食店店主が捕まってたじゃん。

そういう響きをあてがうのって大変なんだよ。特にね、ラブコメが大変なんだよいちいち考えるのがさ。

そういうご都合主義な部分に物申す、作家達の苦悩が分からない奴には腰を据えて問い詰めたい！小一時間問い詰めたい！！

だからさ、そういうのは無しでいこう。ね？世の中には気にしたらダメなこともあるんだから。

「って何作者の気持ちを代弁せにやならんのだああああツツツ！！！」

「千里くんが狂た！？千里くんみんな見とるで！！なんか子連れのお母さんが痛い子見る目で見とうよ！！？」

「クハハハハハ！！兇^まがれ！兇^まがれえ！！！」

「千里くううんっっ！！だめええええ！！！」

少年鎮靜中：

「……………」
「ごめんはやて」

「大丈夫、大丈夫や……私は千里くんが元に戻っただけでも幸せや……」

あれから10分くらい暴走していたらしい。

その様子ははやて曰く、『世の中には知らんほうが幸せゆう時もあるねん』とのこと。

何したし俺。つか、よく魔法とか使わずにいたなあ……。あの女に聞いてみるか。



「さて、こんなもんかな？」

多少いざこざがあったけど、ツヤスコで求めるものをしっかり買い込んだ俺達は帰り道をはやての車イスを押しながら歩いていた。

「いやあなんか異様に疲れたなあ…」

「そうだな……」

とてもとても疲れたので、その辺りのベンチで休むことに。俺は座って、そのそばにはやてが車いすを寄せてはあり、とため息をついていると。

「いいいいいいすやあああああきいいいいいいもおおとおおとおお」

なんなんだこの間の抜ける声は!!と突っ込みたくなるような焼き芋の屋台が目の前を歩いてきた。うぜえ……。けど、いいにおいを醸し出しているんだよ、マジで。

「ええ匂いやな・・・食べてく？」

「そうしようか。ちよっと肌寒いし。おじさん、焼き芋一つ」

「あいよ、彼女と半分こかい？」

「彼女じゃないですけどね」

茶化すおじさんを軽くあしらって芋を受け取り、はやてのどこまでそれを持ってくる。目の前で半分に割ってあげて、はやてに手渡した。

「あ、あつ・・・」

「大丈夫か？」

「う、うんなんとか」

そうして二人並んで焼き芋を食べる。・・・やべ、うまい。

「ほわぁ、アツアツでうまいなぁ。買うてよかったね？」

「ああ、そうだな」

はやてもすごく嬉しそうな表情を浮かべる。その笑顔はとても輝いていて。

「・・・・・・・・・・」

「ど、どしたん？ 顔赤いで？」

「夕焼けが反射しただけだ」

ふう、何とか誤魔化せた。うん、だって本人を前に見とれたとか言えないじゃん。

「さ、さっさと帰ろう。きつとみんな心配している」

「せやね。じゃ、かえろっか」

「ああ」

（おい、舞阪）

（ってなんだよシグナム）

平和に一日終わるかと思ったらシグナムからの念話。なにもこんな時に蒐集はじめなくてもいいじゃないかと思っていたら何かしら違う雰囲気を感じ取った。

（すまない・・・ザフィーラとヴィータが捕まった）

「よし、ちよつと遠回りして帰るかはやて」

「え？ ええのん？」

（おい・・・なぜそこで主はやてとの団欒を選ぶ。その判断は微

「おかげさまでなあ!!!」

ちよまで、アイゼンのラケーテンハンマーで殴ろうとするのはやめろ!!!

「待て、ヴィータ。そいつに報復をするのはあとにしろ」

そう言ってシグナムはレヴァンティンの鞘から剣を抜いた。その視線の先には。

「時空管理局本局執務官、クロノ・ハラオウンだ。少し話を聞かせていただきたい」

クロノがいた。後ろにはなのはとフェイトがカートリッジシステムを携えたデバイスを構えている。

「断ると言えば？」

「力づくにでも」

「だと。どうするよ」

「「もちろん逃げる」」

「だって。なら、俺はその手助けをしますかね」

「させない」

そう言って、クロノはデバイスをこちらに向けた。

「無駄無駄。俺にかなうはずないって」

「な・・・子供のくせに」

「何言ってるの、君も子供じゃん」

「僕は君より5歳年上だ!」

「やれやれ・・・熱くなっちゃって」

そんなこんなですでにシグナム達は転送の準備をしていた。ただ、ヴィータは若干心配そうだ。

「心配か？俺が」

「そんなじゃねーよ。負けたらぶっ飛ばすかな」

その言葉を最後に、ヴィータの声は聞こえなくなる。・・・よし、舞台は整った。

「さて、かかってこい。まとめて相手してやる」

「その言葉、後悔しないd」「デイバイイイイン、バスタアアアアアアア！！」

ってなのはクロノのセリフにかぶせてやんなよ！心なしかクロノが切なそうだぞ！

「くっ、『ロー・アイアス熾天覆う七つの円環』！」

とっさに展開したアイアスで砲撃を防ぐ。投擲・射撃に強いこの盾なら十分に防いでくれるだろう・・・

「ハアアアケン、セイバアアアア！！」

「うお！？」

その背後からフェイトがゼロ距離ハーケンを叩き込んでくる。体をひねって回避した俺は両腕に干将・莫耶を展開した。

「それはあの時の！」

「ああ、あの時の双剣さ。名前は干将と莫耶」

フェイトと熾烈なアサルトを仕掛けながらそんなことをしゃべる。

「それが、あなたのデバイスなの!？」

「なわけあるか。デバイスなんかねーとお!!！」

やばいやばい。フェイトに気を取られていたら、なのはのアクセルが襲いかかってきた。ついでにクロノのステインガースナイプがやってきている。

くくっ、確かに1対3はきつい。けど、俺にはこの力がある!!
俺は飛翔しながら、魔法を詠唱する。

「フォア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ! 光の精霊101柱、集
い来たりて敵を討て! 魔法の射手連弾・101矢!!！」
サギタ・マギカ セリエス・ルーキス

なのは達の魔力弾をはるかに超える101の魔力弾。全部相殺させてもこれは防ぎきれまい。

「な、なんなんだこの桁違いの数は!？」

「は! これぐらいで驚いてるんじゃないやねえよ!!！」

さらに詠唱。そして莫耶を戻してからクロノに左手を向けた。

「ライトニングバインド!!！」

「く、うわあ!!！」

「クロノ君!!！」

「クロノ! ?ってあれは私の!!！」

「補足しておく君の妹より強度があるからな」

「く・・・くそっ・・・!!！」

くくく、悔しいだろうなあクロノ。なんせ義理の妹の前で醜態をさらしたもんなあ。あとは二人。

「はあああああ!!!」

「ちっ!」

至近距離からのブリッツに一瞬捕らえられなくなるが、目が慣れたらこっちのもの。若干攻撃も直線的d「アクセルシューター、シュート!」ですよねー。なのはさんフリーだもんね。

しかたなく、距離を取って再び莫耶を呼び出してシューターを切り払いつつ、フェイトの攻撃をけん制する。やっべ、けっこう疲れるな・・・なんでほかの転生キャラって圧倒的火力で戦えるのかね? そりゃ俺も全力でやりたいけど・・・うん、女の子いじめるの好きじゃない。なのでちまちまちま・・・。

「だああああ!!! もう無理!!!!」

めんどくせえ!!!! 一気にカタをつける!!!!

「来い、焰竜凰剣レヴァンティン!!!」

干将・莫耶を戻してシグナムのそれとは違う、もちろん宝具のレヴァンティンとも違う・・・魔界の魔剣を呼び出した。そして、そのむやみに放出されている黒い炎を練り上げて、自分の頭上にかき集めた。

「炎凰、爆碎!!! 炎天魔陣!!!!」

そのまま、レヴァンティンを振りおろした。そこから放たれる三日月状の炎。

「……死んでないよな？」

むしゃくしゃして思い切りやつちまった感があるけど……。心臓ばくばくで爆発先を見やったらなんとか生きていたらしい。が、その足元には10発分のカートリッジが。

「フェイトちゃん！」

「な、なのは大丈夫……？」

「フェイトちゃんこそ大丈夫なの！？」

「わ、私は、だい、じょう……」

そこで、フェイトは気を失った。ちょっと火傷してるのが非常にいたたまれない……。ごめんよフェイト。
ちなみにクロノは爆風でどっかに吹っ飛んでいた。

「さ、あとはなのは。君だけだ」

「う……でも、私はあなたからお話が聞きたい」

はあ、やっぱり頑固だな。どうしてそこまでできるんだろう。

「なあ、どうしてそこまで躍起になって話を聞こうとしているんだ？」

「だって、それは……。きっとどっちも事情があっぺこういうことしてるんだと思う。それを真っ向から否定するのはおかしい思っぺ」

へえ……。9歳なのに、こんなしつかりとした考えがあるんだな。

「それを聞けば、きっとみんなが傷つかない方法がきっと見つかると思うの！だから、お話聞かせて？」

でも、甘ちゃんて頑固なのは変わらないと。・・・やれやれ、仕方ない。

「悪いけど、話はできない。けど、なのはらが追っている事件について、ヒントつか、みんなのこの状況を一言で表してやる」

「うん・・・」

「最初になのは言ったな？きっとみんなは事情があってこういうこととしてるって。それは正解。みんな自分の目的がある・・・もちろん、俺も。そして・・・それは愛するもののために」

「え、それってどういうーーーーー」

「閃光《flash》」

「え、きゃ！！？」

そこまで話して、さく裂魔法で目くらましさせて逃げた。・・・俺って、アマちゃん？

第7話 なかなか進まねえorz（後書き）

千里「なんで始動キーが夕映？」

作者「千里に似合いそうだったから」

千里「さいで」

作者「しかし・・・話がすすまないね・・・」

千里「そもそもA'sがうろ覚えだしな。しかもwiki見たら意外な内容の濃さで執筆が停滞しそうなんだろ」

作者「停滞はしないけど・・・書くのは遅れそう・・・」

千里「なのはファンに謝れ」

作者「調子こいてすいませんでしたOTZ」

千里「つか、魔剣ってなに？」

作者「ひと昔にはまった携帯ゲームに出てきた剣。けっこうカッコいいから」

千里「厨二全快だったけどな・・・」

作者「まあまあ。さて次回はけっこう飛ばして闇の書覚醒ぐらいまで飛ばすか」

千里「がぼっとはしよったな」

作者「ご都合主義です」

千里「・・・とまあ、こんなぐだぐだですが、これからもご愛読いただければと思います」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9916z/>

魔法少女リリカルなのはRewrite

2012年1月7日01時45分発行